

第9章 墓ノ堂古墳の検討

—大上古墳群の盟主墳—

1. はじめに

今回報告した墓ノ堂古墳の測量および立会成果により（本書第7章）、本古墳の新たな資料を報告することができた。これらの資料により、墓ノ堂古墳の詳細な位置づけについて検討することが可能となった。本稿では、これまでに明らかにされてきたものも含めた墓ノ堂古墳についての資料をまとめ、この古墳の位置付けについて新たな資料に基づき検討したい¹⁾。（實盛）

2. 墓ノ堂古墳の研究史

墓ノ堂古墳が初めて古墳として紹介されたのは、大正11年発行の『大阪府全志』においてであった（井上1922）。古墳は当時からすでに共同墓地として利用されていたが、「小高くして塚形」を為す墳形と、付近の「塚脇」の地名から、古墳であることが指摘された。また、「先年其の附近開墾の際に、埴輪・圓筒の破片を出せしといふ」として、埴輪が伴うことも示された。

大阪府の史蹟調査会常任委員であった平尾兵吾は、昭和3年の史蹟名勝天然記念物調査報告において初めて「墓の堂古墳」として名称を付した（平尾1928）。併せて、古墳南側に大同電力の送電鉄塔が建設された際には²⁾、周溝が検出されたことを述べた。また、旧の東高野街道がこの場所で迂回していることを、「大なる古墳を避けたるもの」と指摘した。加えて、昭和6年の北河内郡教育会の報告では、「西を正面とせし双子塚らしく、現在の墓地は前方の部分らしく思はれる」として、前方部を西に向けた前方後円墳と考えた（平尾1931）。

平尾のこの記述をもとに、墳形の検討が行われていくこととなった。山口博は昭和43年出版の著書の中で、「東側の後円部が削られたとすると縦五十米、幅三十米位の大古墳」と述べ、初めて墳丘規模の検討結果を示した（山口1968）。昭和47年刊行の市史では、その数値を修整し、「主軸100米にも及ぶ」と述べた（山口編1972）。

その後、櫻井敬夫が古墳西側の地形に注目し、昭和52年の著書の中で、現存の「中野の墓地がこの古墳の主要部分、すなわち後円部であるらしく」、「主軸はほぼ東西に約百二十米前後と推定することができる」とした。また「墓地最高所の老樹の下に大きな石があるという言い伝え」に言及した³⁾（櫻井1977）。この墳長と墳形にかんする見解はその後平成初期ごろまで踏襲されることとなった（四條畷市立歴史民俗資料館編1990、天野1990、天野・秋山・駒井1992、一瀬1995）。

その状況に変化が生まれたのは、昭和17年撮影の航空写真の検討が行われたことによるものであった。そのことが最初に記述されたのは平成9年のことで、野島稔が「全長62m」と指摘を行った（野島1997c）。平成20年に行われた講演会では詳しい検討内容の報告があった（野島2009）。航空写真に写っていた古墳に隣接する「建物の大きさを計測しそこから前方後円墳の長さを計算」したもので、昭和17年当時の残存墳丘の規模が判明した。また、この検討により古墳が南北方向で前方部を北に向けていることがわかった（四條畷市史編さん委員会編2016）。

古墳の築造時期については、櫻井敬夫が古墳時代中期という認識を示し（櫻井1977）、河内一浩が出土埴輪について川西宏幸による円筒埴輪編年（川西1978）Ⅳ期と指摘した（河内1987）。これに基づき『前方後円墳集成』ではその6～7期と編年された（天野・秋山・駒井1992）。出土埴輪は平成9年に初めて写真が掲載され（野島1997c）、井上主税が須恵質のものが含まれることを指摘し（井上2003）、西本和哉が実測図を紹介した（西本2009）。

このように、墓ノ堂古墳はこれまでの研究により、古墳時代中期後半築造で墳長約62mの前方後円墳との位置づけがなされてきた。しかし、現在墓地であることもありこれまで墳丘測量図は作成できておらず、出土埴輪も西本和哉が一部を紹介したのみであり、詳細な検討のための基礎資料が不足している状況であった。このため、本書7章で述べた通り航空レーザ計測の手法を用い測量図の作成を行うとともに、出土埴輪の報告を行うに至った。（實盛）

3. 墓ノ堂古墳の墳形

平成28年度に、四條畷市では大東市とともに飯盛城跡の保存活用を推し進めるため、城跡の三次元航空レーザ計測を実施することとなり、平成28（2016）年7月1日にアジア航測株式会社によりロビンソン・ヘリコプター製R44Ⅱ航空機を用い、Trimble社製レーザ計測機材Harrier56を使用して1.0m×1.0mメッシュあたり10点以上の精度で航空レーザ計測を行った。

その後の整理過程で計測範囲に墓ノ堂古墳の墳丘が含まれていることが判明したため、墓ノ堂古墳周辺について計曲線1m、主曲線20cmで測量図の作成を行った。また、航空レーザ計測の成果を用い赤色立体地図の作成を行った。（本書第7章）（實盛）

墓ノ堂古墳は、第7章において報告した測量図では改変が認められ、墳丘の規模や墳形など検討の余地が残る。検討を進めるにあたり、航空写真と航空レーザ測量図を基礎資料とした。また、1995年立会調査で周堤が、2011年立会で墳丘裾の基底石が確認されており、それも反映した。航空写真を用いた検討は、城郭の構造解明に利用されており、有効であると考えられる（岡寺2019）。そこで、国土地理院のホームページで閲覧できる「地図・空中写真閲覧サービス」を利用し、アメリカ軍撮影の昭和23年空中写真を用いて検討を行った。なお、より鮮明なもので検討を行うために、高解像度のものを取り寄せた。この写真をみると墓地が立地する墳丘は樹木がみられること以外全体の形状におおきな変化はみられない。以下、墓ノ堂古墳の墳丘の規模や墳形などについてみていく。

まず、後円部側からみていく。測量図の墳丘と考えられる部分の南西外側に、T.P.+17.2~17.8mラインにやや乱れがあるものの円弧を描く部分があり、これを元に径を求め、さらに中心点を確定した。中心点は $X=-139,950$ 、 $Y=-32,743$ で、O点とする（上田1969）。この円弧を周堤平坦面の墳丘側傾斜変換点とし、その径は66.7mである。1995年の立会調査で確認された遺構から周堤平坦面幅を4m程度とした。これにより周堤平坦面の外側傾斜変換点を径74.7mとした。後円部径はO点をもとに、2011年の立会調査の図面を測量図におとし、墳丘裾の基底石と考えられる石列から径47.3mとした。この後円部の復元を空中写真に当てはめると、墳丘の周囲にみられる色調の濃淡とも一致する。

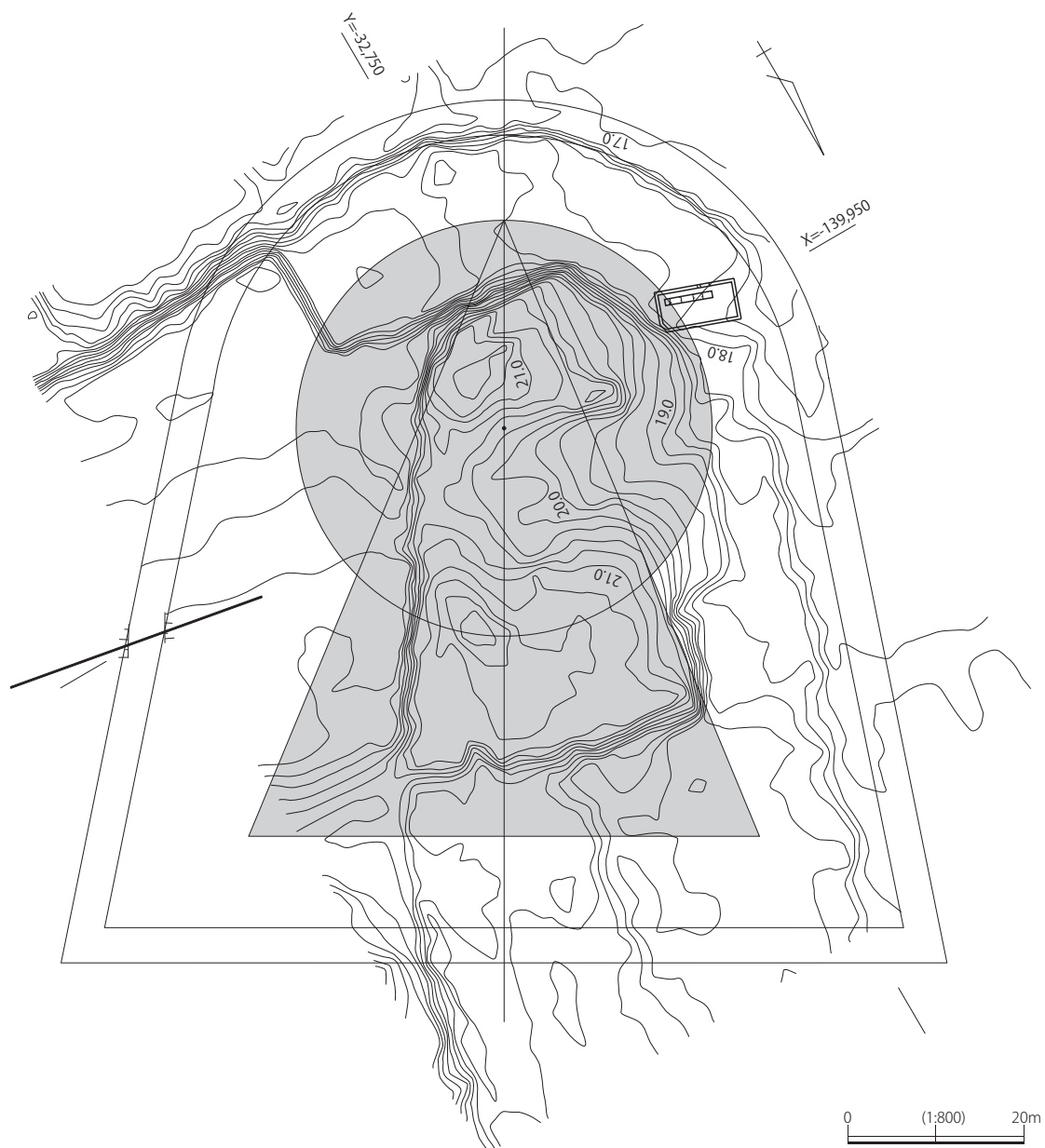
次に前方部側をみていく。前方部については、墳丘の復元を行う要素が乏しいため前方部側周堤から復元を行った。墳丘東側では1995年立会調査で周堤がみつかり、この図面を測量図におとした。西側については反転を行った。前方部側周堤の復元を空中写真に当てはめると、西側に通る東高野街道や周囲にみられる色調の濃淡と一致する。前方部正面周堤は、現在宅地化され現状をとどめていないが、空中写真を確認すると、痕跡と考えられる畔状の地形が存在する。また、墓ノ堂古墳西側を通る東高野街道が、この畔状地形と交わる場所で北東側に屈曲していることから、前方部正面周堤を確定した。墳丘の前方部は、墳丘と周堤との幅が後円部側で確定しており、約10mである。前方部正面の墳丘と周堤の幅についても同様であるとし、約10mとした。前方部側面については、墳丘西側斜面、空中写真にみられる色調の濃淡、墓ノ堂古墳に残存するくびれ部の現地形から決定した。なお、墓ノ堂古墳の東側と西側では約2m前後の高低差がある。

以上のように墳形の検討から墓ノ堂古墳は、墳長約70m、後円部径47.3m、くびれ部幅約34m、前方部長22.7m、前方部幅約58mの前方後円墳で、周堤と周溝を伴い、両者を含めた兆域の全長約98m、最大幅約101mに復元できる。西側部分の周堤はのちに東高野街道として利用されているとみられる。墳形は後円部に対して、前方部が比較的短く、開いた形状をしている。

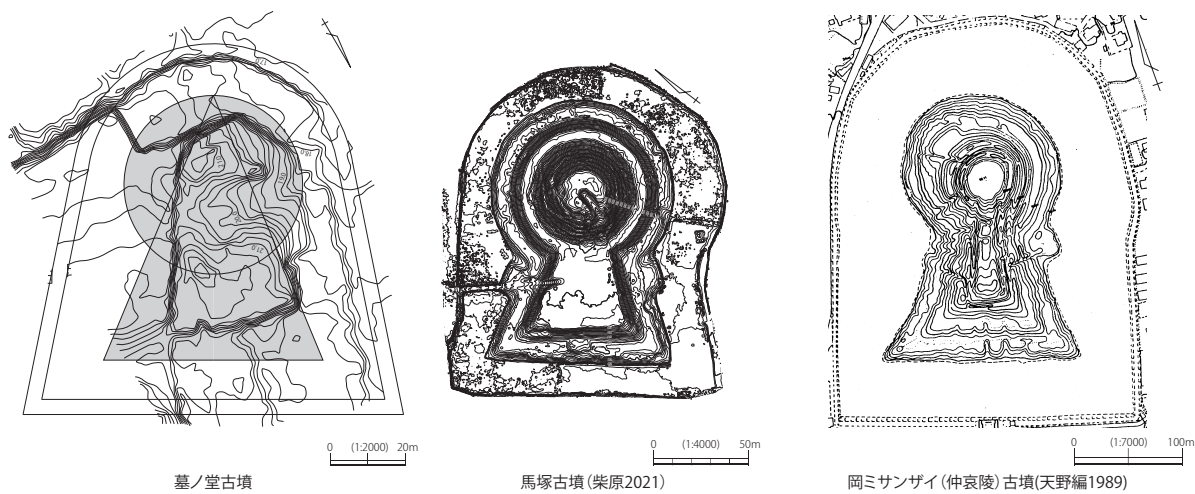
墓ノ堂古墳と墳丘形状が類似する古墳をあげていく。以下、2古墳について検討を行う。

まず、三重県名張市に所在する美旗古墳群最大の馬塚古墳である。墓ノ堂古墳と馬塚古墳を比べると比較的形態に共通性がある。しかし、馬塚古墳は基壇の上に後円部2段・前方部1段構造をもつ前方後円墳であることが判明しており（柴原2021）、本来の墳丘と比較すると類似性が薄い。また、墓ノ堂古墳は後述するが古墳時代後期初頭築造に対し、馬塚古墳は中期後葉であり、若干の開きがある。以上のことから、馬塚古墳の基壇を含めた比較で類似するものの、両古墳の関係性を示す証左には乏しいといえる。ただし、墓ノ堂古墳の東側と西側では約2m前後の高低差があり、この高低差をうめるための基壇状施設が存在した可能性がある。墳丘の調査を行っていないため確定できるわけではないが、存在したとすれば十分に関係性を考えることは可能であろう。

次に、大阪府藤井寺市に所在する岡ミサンザイ古墳である。墓ノ堂古墳と岡ミサンザイ古墳を比べ



第17図 墓ノ堂古墳 墳丘復元図



第18図 墓ノ堂古墳と墳形が類似する古墳

ると、墓ノ堂古墳と築造時期が近似するが、測量図上の墳丘の形態には類似性を見出せない。しかし、岡ミサンザイ古墳は、後世の改変が著しく墳丘構造に不明な点が残されており、後円部については現状より墳丘裾が外側に、前方部については現状より内側にあるとされている（福尾・清喜1998）。これを考慮し比較すると十分に共通性を考えることができる。また、岡ミサンザイ古墳は同時期最大規模を誇り、墓ノ堂古墳も北・中河内地域で随一の墳丘長を誇る。両者に関係性があったとみることは十分に可能であろう。（古谷）

4. 墓ノ堂古墳の出土遺物と築造時期

墓ノ堂古墳では第7章で報告したように、1995年・1998年・2011年の立会調査で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬飼形人物埴輪・武人埴輪・馬形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪・大刀形埴輪等が出土している。

このうち円筒埴輪は、外面調整タテハケ、内面調整ナデとハケを施す。円形透孔を配置する。突帯間隔設定技法はみられない。底部径23.0cmのものがあるが、胴部径29.4～35.4cmとやや大型のものが大半を占めるようである。破片のみで段数が不明なものの5条6段以上と考えられる。このように、外面調整タテハケのみで突帯はやや突出しているものの突帯設定技法が省略されており、川西編年（川西1978）のV期に位置づけられる。

また、形象埴輪は出土状況から周堤上に樹立していた可能性が極めて高く、各種形象埴輪が揃った堤上埴輪祭祀が執り行われていたといえる。古墳時代中期中葉から一部の古墳で周堤上に形象埴輪が並んだようであるが（小浜2005）、主流となるのは古墳時代後期になってからであり、これは「後期埴輪様式」ともいわれ（東影2018）、古墳時代後期にあたる。

以上、出土埴輪の検討から墓ノ堂古墳は古墳時代後期に築造されたことがわかった。築造時期をさらに詳細にしぼるために、隣接する大上古墳群の様相を確認しておきたい。（古谷）

5. 大上古墳群における円筒埴輪

墓ノ堂古墳に隣接する大上古墳群は、四條畷市大字清瀧を中心に所在する古墳時代中期から後期にかけての古墳群で、前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳、方墳からなり、これまでに合計15基の古墳を調査で確認している（村上・實盛編2017）。なかでも3号墳は墳長37.5m、周溝を含めた全長約45mの帆立貝形古墳で（村上2006）、近接する全長約40mの前方後円墳とみられる4号墳（野島1999）と並び、高所部において顕著な規模を持つ。このうち、大上2号墳、3号墳、6号墳、7号墳、8号墳、9号墳、10号墳、12号墳、14号墳の9基から円筒埴輪が出土する。また、その周辺にも古墳の存在を示す遺構が検出された箇所がある。墓ノ堂古墳の埴輪の様相や時期比定をするうえで不可避と考えられ、埴輪の様相を中心にあらためて概要を以下で記述する（第1表）。

大上2号墳（四條畷市史編さん委員会編2016、村上・實盛編2017） 墳形・墳丘規模は不明であるが、周溝と思われる溝から蓋形埴輪と形象埴輪基部底部に押付突帯を貼りつけるもの（東影2010）、および円筒埴輪5個体以上出土している。すべて底部径15cm前後で小型品である。このうち4個体は、底部から口縁まで残存している⁴⁾。すべて、4条5段構成で、2・4段目または2・3・4段目に円形透孔を配置する。外面調整はタテハケ、内面調整はナデである。底部調整が施され、突帯まで板状工具が当たるものが存在する。すべて、口縁部に「↑」のヘラ記号が施される。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は9.0～10.0cm前後、突帯間隔は9.0～10.0cm前後、口縁部高7.5～9.5cm前後である。もう1個体は、須恵質で3条4段まで残存する。2段目に円形透孔が配置され、3段目には透孔が配置されないことから2・4段目に円形透孔が配置されたと推定される。外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施され、外面調整は右上がりのタテハケで、左利き工人の存在が指摘できる。底部高と突帯間隔は9.0～12.0cm前後である。

大上3号墳（村上2006） 墳丘長37.5mの帆立貝形古墳で、底部径15cm前後、口縁部径最大25cmで、3条4段の円筒埴輪が出土し、2・3段目に円形透孔を配置する。外面調整はタテハケ、一部個体でヨコハケ、内面調整はナデである。また、蓋形埴輪と軋形埴輪が1個体ずつ出土している。円筒埴輪は、正立と倒立による焼成が行われている。正立で焼成を行うものは、底部高10cm前後、突帯間隔9cm前後である。これに伴うものか不明であるが、口縁部高6.5cmのものが存在する。倒立焼成のもの

第1表 大上古墳群出土埴輪の組成

名称 (調査記号)	埴形	規模	埴輪	時期	円筒	蓋形	家形	石見型	盾形	靴形	大刀形	人物	馬形	形象基部 押付突帯	主な遺物・その他
墓ノ堂古墳	前方後円	70	○	後期初頭	○	○	○	△	△	△	○	○	○		
大上1号墳 (OG1992-1)	円	19.4	×	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	刀子・馬具・馬歯 周溝内埋葬2基
大上2号墳 (OG1992-2・ 2017-1)	不明	不明	○	後期前半	○	○								○	鳥形ハソウ・馬歯 不明形象埴輪
大上3号墳 (JO1997-1・ JO1999-1・ KMH・JO2003-2)	帆立貝形	35.3	○	中期後葉 (TK23・47)	○	○				○					二段築成
大上4号墳 (OG1998-2)	前方後円	40	×	中期末	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器類・白玉
大上5号墳 (OG1998-2)	不明	不明	不明	後期											横穴式石室・金環
大上6号墳 (OG2013-1)	不明	不明	○	後期前半	○	○		○					○		白玉・馬歯
大上7号墳 (OG2013-2)	不明	不明	○	後期前半 (TK10古相)	○			○	○						
大上8号墳 (OG2013-2)	(円)	16.4	○	後期前半	○										土器類・馬歯
大上9号墳 (OG1994-1)	方	不明	○	後期初頭 (MT15)	○			○	○						不明形象埴輪
大上10号墳 (OG1998-1)	不明	不明	○	後期	○										鉄鉋・鉄鋌
大上11号墳 (OG1999-1)	(円)	27		後期											土器類
大上12号墳 (KMH1995-1)	方	22	○	中期中頃 (TK73～216)	○		○								
大上13号墳 (NS1996-1)	方	15	×	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器類
大上14号墳 (KMH1996-1)	方	16	○	中期後半	○										鉄斧
大上15号墳 (KMH1995-1・ 2003-1)	方	20	○	中～後期								○			鉄斧
大上16号墳 (NS1996-1)	方	17	○	後期	○	○		○			○			○	
大上17号墳 (NN1993-1)	方	20	×	後期?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	埋葬施設
黒石古墳	不明	不明	○	不明	○										陶棺

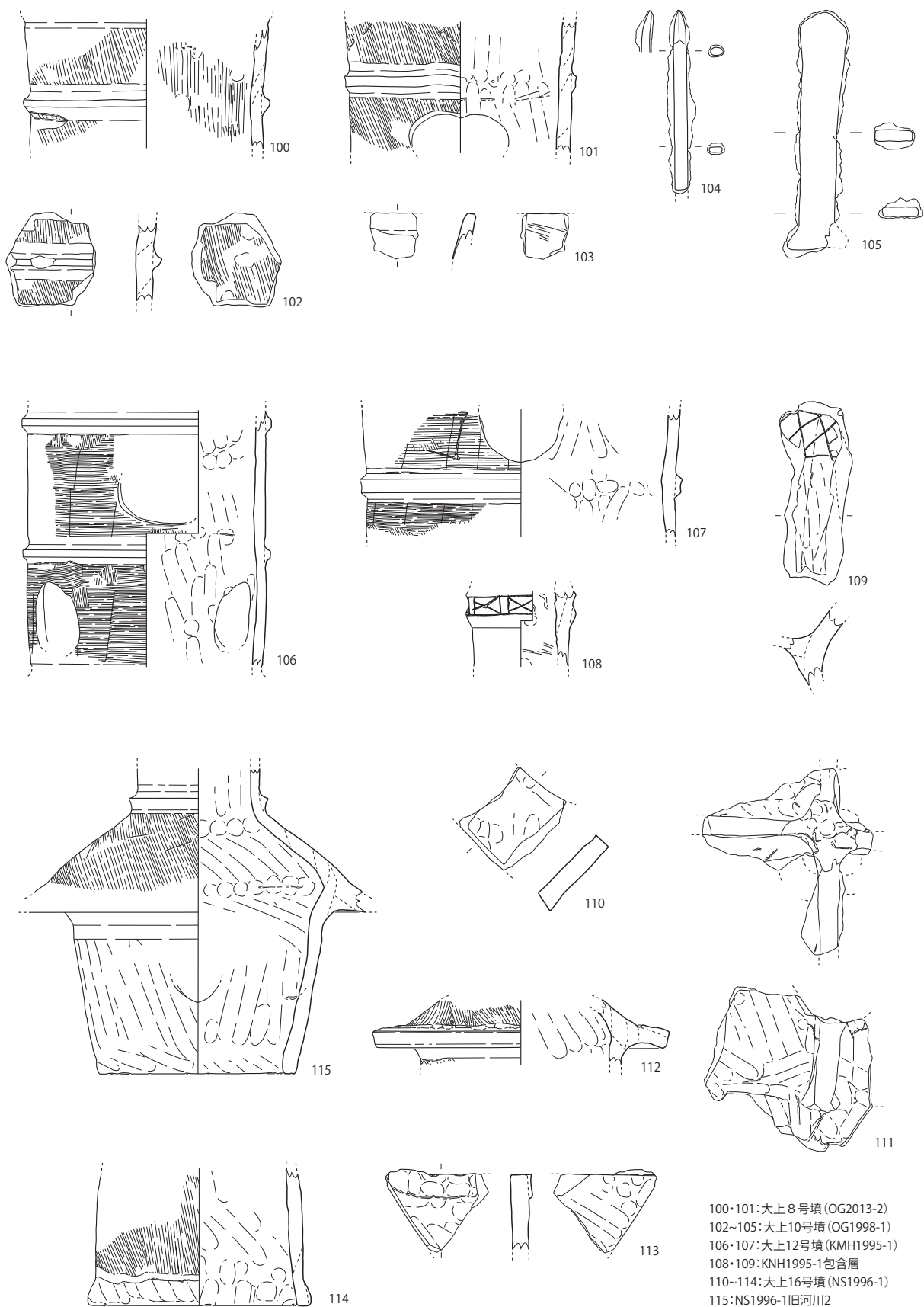
は底部調整を行い、底部高13～16cm前後、突帯間隔10～12cm、口縁部高10～13cmである。

大上6号墳(村上・實盛編2017) 埴形・埴丘規模は不明であるが、円筒埴輪と石見型埴輪・蓋形埴輪などが出土している。円筒埴輪は、底部径15～20cmで、4条5段構成2・4段目に円形透孔、外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施される。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は8.4cmと11.4cm、突帯間隔10～12cm前後、口縁部高9～10cm前後である。

大上7号墳(村上・實盛編2017) 埴形・埴丘規模は不明であるが、円筒埴輪と石見型埴輪・盾形埴輪が出土する。円筒埴輪は、底部径17cm前後で、外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施され、突帯まで板状工具が当たるものが存在する。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は8cm前後と12cm前後、突帯間隔12cm前後、口縁部高10cm前後である。

大上8号墳(村上・實盛編2017) 直径16.4mの円墳で円筒埴輪の破片が出土している(第19図ー100・101)。胴部径は20cm前後で、外面調整はタテハケ、内面調整はナデとハケを施す。円形透孔を配置する。突帯もしくは口縁部が割れた破片があり、間隔は8.0cm+である。

大上9号墳(村上・實盛編2017) 周溝の直径約10mの円墳と考えられているが、あらためて出土遺物を含め確認を行った。周溝と考えられる溝からコンテナ約14箱分の埴輪が出土しており、直径約10mの円墳としては大量といえる。測量図をみる限り、周溝肩部は延長5.5m分を検出できただけであり、方墳の隅部における屈曲を検出した可能性も考えられる。これらのことから、本墳については方墳として取り扱いたい。円筒埴輪と、盾形埴輪、上辺を突起や粘土で加飾する石見型埴輪などの形象埴輪が出土する。円筒埴輪は、複数個体出土している。底部径15cm前後である。突帯間隔設定技法はみられないものの、底部高9～12cmの一群と14～16cmの一群が存在する。底部高9～12cmのものは



第19図 大上古墳群出土埴輪・鉄製品

底部調整がケズリで、底部高14～16cmのものは底部調整が板オサエである。突帯間隔11cm、口縁部高9.5cmで、2段目と4段目に円形透孔を配置する。

大上10号墳（野島・村上1999） 墳形は不明であるが古墳の周溝とみられる溝（溝1）を検出したもので、周溝内及び包含層から円筒埴輪片数点が、周溝の西側に隣接する位置から鉄鉈、鉄鋌が出土した。円筒埴輪はその他の古墳と同様のもので古墳時代後期のものといえる（第19図－102・103）。鉄鉈は報告において刀子と記述していたもので、鉄鋌は鉄刀としていたものである（第19図－104・105）。鉄鋌は長さ20.5cm、重さ235.8gで、朝鮮半島加耶地域でみられる形態に近い特徴を持つ。

大上12号墳（村上2006） 一辺22mの方墳で5個体以上の円筒埴輪と家形埴輪が出土している。このうち円筒埴輪は、外面タテハケ調整のみのものと、外面調整は底部タテハケ調整、2段目はBc種ヨコハケが施されるものがある。内面調整はナデ調整である。底部径は14.0cm前後である。底部高は12cm前後で、突帯間隔10.9cmである。2段目には円形透孔を配置する。そのほかに、最下段は残存しないが、胴部で約2条3段分残存し、Bb種ヨコハケが施されるものがある。突帯間隔11.4cmである。円形透孔を連段で配置する（第19図－106）。また、ヘラ記号をもつものがある（第19図－107）。

なお、同一調査の包含層出土で12号墳に伴わないものであるが、剣形埴輪と思われる把縁部が出土している（第19図－108）。これは同様のものが中野遺跡9次調査でみつかった（西尾1987）。加えて、中央分割帯を斜格子文で分割する石見型埴輪が出土している（第19図－109）。

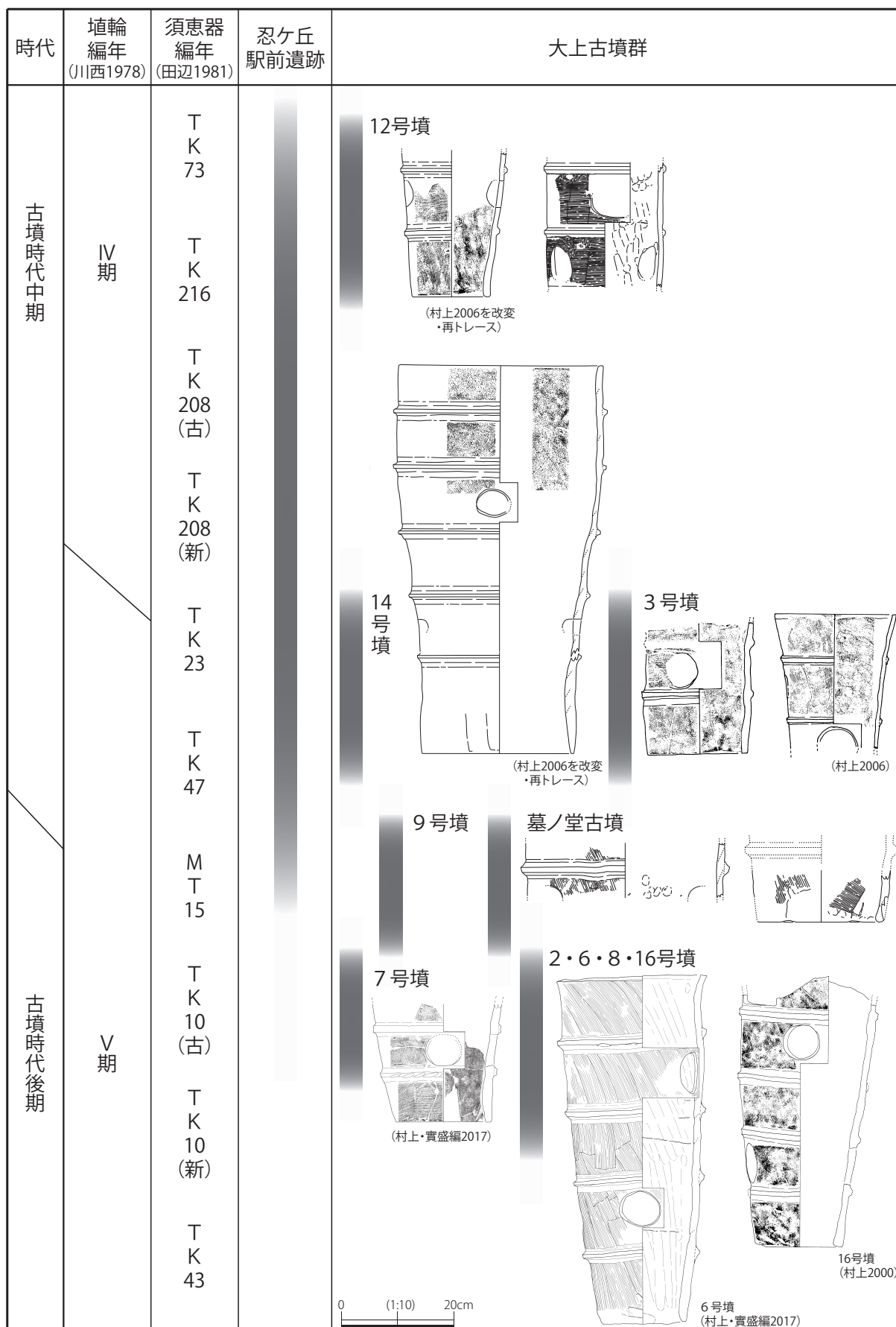
大上14号墳（村上2006） 一辺16mの方墳で1個体の円筒埴輪が出土している。口縁部径36.8cmで、5条6段以上と思われる。外面調整はタテハケで、一部ヨコハケ調整を施す。内面調整はナデである。口縁部高と口縁部下1段目は9.0cm前後である。突帯間隔は11.5cm前後である。接合しないものの同一個体と思われる底部が存在し、底部高は17.5cm、底部径は26.4cmで、底部調整が施される。

大上16号墳（村上2000） 四條畷小学校内遺跡では1996年度調査のB地区で13号墳を確認しているが、D地区の土坑54からも円筒埴輪が出土している。この遺構は、遺構面検出精査後に断面で確認した遺構のため、平面形態が不明確で、上面で検出した浅い落ち込みと一連のもので、実際は幅約2.5mの溝である可能性が報告されている。また、同一遺構面でこの溝と平行に走る最大幅約2.7mの溝9が検出されている。さらに、両遺構が位置する箇所には一段階古い旧河川（旧河川1）が存在したと報告されているが、両遺構検出面において埴輪片がまとまって出土しており、旧河川1に属するものとして報告されている。調査断面図を確認すると、両遺構のベース面となる土層とそれより上層とでは土層堆積が異なっており、これは土質の違いから堆積時期に起因するものとみられる。この遺構面（第2遺構面）の段階で両遺構に挟まれた箇所は一度何らかの削平が行われている可能性が高い。遺構面検出の埴輪片はこの時遺存したものであろう。これらのことから、両遺構に挟まれた部分に古墳墳丘が存在した可能性が考えられ、これを大上16号墳としたい。規模は一辺約17mの方墳とみられる。出土埴輪は土坑54出土として報告された底部径15.8cm、底部高10.0cm、突帯間隔10cm前後の円筒埴輪と、溝1出土として報告された中央分割帯を斜格子文で分割する石見型埴輪があり、これ以外に大刀形埴輪、蓋形埴輪の立飾部、上辺を粘土で加飾する石見型埴輪、形象埴輪基部底部に押付突帯を貼りつけるものがある（第19図－110～114）。なお、関連資料として同一調査でD地区の旧河川2から蓋形埴輪が出土している（第19図－115）。（實盛・古谷）

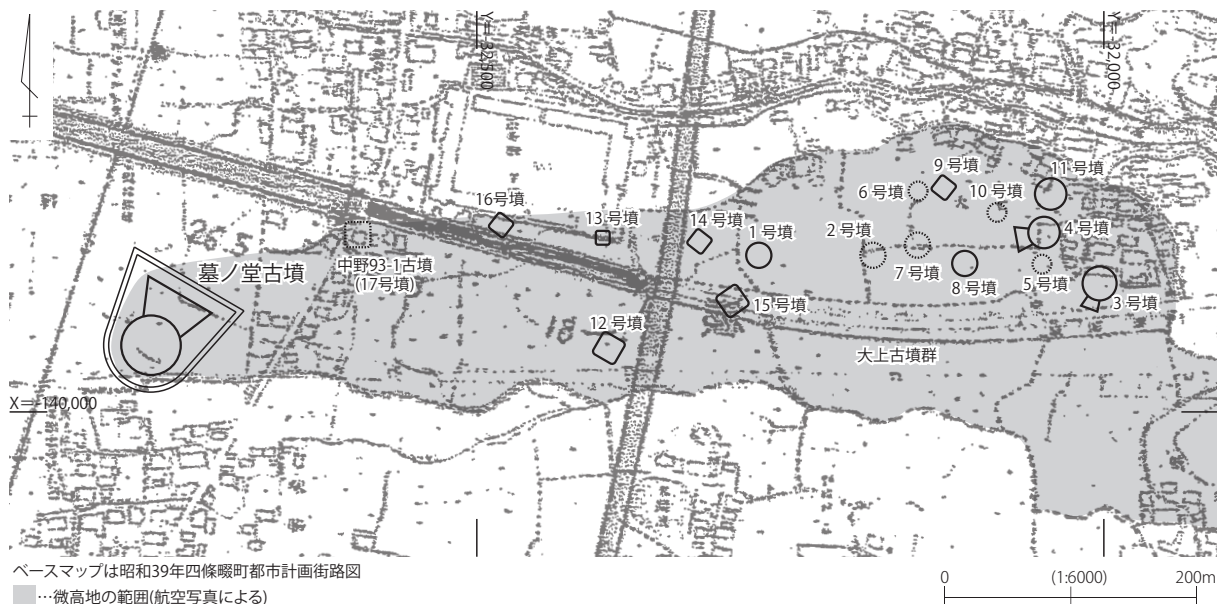
6. 大上古墳群の変遷と埴輪生産

墓ノ堂古墳や大上古墳群を考えるうえで重要な遺跡が存在する。これまで埴輪が並んだ集落跡として考えられてきた忍ヶ丘駅前遺跡である。同遺跡では、大溝や土坑などから、古墳時代中期中葉から後期の円筒埴輪や形象埴輪が大量に出土している。このようなあり方は通有の集落跡とは一線を画しており、集積地などの埴輪生産に関連する遺跡と考えられる。また、こういった状況は同様に岡山南遺跡でもみられ、これらの遺跡は周辺域⁵⁾に埴輪を供給した一つの拠点であった可能性がある。

さて、大上古墳群では、まず12号墳を嚆矢として古墳が築造され始める。12号墳では、Bb・Bc種ヨコハケがみられ、底部高や突帯間隔、窖窯焼成などの要素から、TK73～TK216型式期に位置づけられる。なお、ヘラ記号をもつものがあるが（第19図－107）、この個体は比較的忍ヶ丘駅前遺跡のものと近似し、同遺跡から一部供給された可能性がある。



第20図 大上古墳群出土円筒埴輪の変遷



第21図 墓ノ堂古墳と大上古墳群の位置関係

中期後半になると、やや大型の円筒埴輪が出土する14号墳と3条4段の円筒埴輪が出土する3号墳が築造される。14号墳は一边16mの方墳でありながらやや大型の円筒埴輪がみられる一方、墳丘長37.5mの帆立貝形古墳である3号墳では3条4段の小型のもので、円筒埴輪の規格が墳丘の規模や形態と対応しないことがうかがえる。両墳では底部調整を行う共通点があるものの、それ以外では共通性を見出せず、古墳ごとに個別に埴輪が供給されたといえる。さらに、3号墳の埴輪はバリエーションに富んでおり、一古墳においても複数の製作集団の関与が想定される。14号墳では底部高17.5cm、3号墳では底部高16cmと突帯間隔に対して底部高が高いものが主流となっている。

続いて後期初頭に9号墳と墓ノ堂古墳が築造される。9号墳は底部調整から異なる工人集団の存在がうかがえるものの、4条5段構成など全体のプロポーションに斉一性が認められる。墓ノ堂古墳は大型品を主体とすることが明らかである。両古墳は同一の工人集団による製作が想定され⁶⁾、複数の古墳に埴輪が供給されたといえる。この段階でも、突帯間隔に対して底部高が高いものが存在する。

次段階では、2・6・7・8・16号墳と多くの古墳が築造される。このうち7号墳は、出土した須恵器からTK10型式古相段階で、2・6・8・16号墳についてもほぼ同時期である。複数の工人集団の関与がうかがえるものの底部調整はほぼ統一化され、古墳を超えた同一の工人集団による製作が想定され、複数の古墳に埴輪が供給されたといえる。

以上のように大上古墳群では、中期後半から後期にかけて、①底部調整を行う、②底部高の縮小化、という共通事項が認められるものの、埴輪生産の連続性を認めることはできない。一方、後期初頭に北・中河内地域で随一の墳丘長を誇る墓ノ堂古墳築造を契機に埴輪生産体制の刷新がうかがえる。墓ノ堂古墳を頂点とし、それ以外の古墳では4条5段の円筒埴輪が採用され、古墳の階層秩序に応じた作り分けが行われていたといえる。異なる製作集団を超えて斉一性が認められるようになる。TK10型式期には底部調整の統一化も図られる。また、形象埴輪からも、①多彩な形象埴輪が供給されるようになること、②各種形象埴輪が揃った堤上埴輪祭祀の採用など、形象埴輪が著しく少ない中期後半の当古墳群とは別様である。

(古谷)

7. 墓ノ堂古墳の位置付け—讃良を基盤に河内湖を見据えた大上古墳群の盟主墳—

以上のように、墓ノ堂古墳の墳形および築造時期について検討してきた。本墳を周辺地域において位置づける上では、先述のとおり近隣に位置する大上古墳群との関係性を捉えることが必要である。

大上古墳群と、墓ノ堂古墳との位置関係をみたのが第21図である⁷⁾。これみると、大上古墳群と墓ノ堂古墳は、中小流路等に挟まれた同一の微高地上に築造されていることがわかる。両者の間には距

離があるため、一見するとその関係性は不明瞭に感じられるが、両者のほぼ中間の位置で、中野遺跡1993-1次調査において古墳の埋葬施設を検出している（四條畷市史編さん委員会編2016）。この古墳は周辺の調査で検出した落ち込みとの関係が指摘されており、そうであれば一辺20m程度の方墳の可能性があり、これを大上古墳群の17号墳として取り扱うべきだろう。また、四條畷小学校内遺跡の今回大上16号墳とした方墳もその周辺に所在している。これらのことは、大上古墳群と墓ノ堂古墳との間の空白地帯にも、未発見の古墳が存在する可能性を示すものといえるだろう。墓ノ堂古墳は、大上古墳群の造営主体と深い関係性を持つ被葬者が埋葬されているものと考ええる。

また、墓ノ堂古墳それ自体の築造位置に着目すると、大上古墳群が存在する微高地上の最も先端の位置に造られている。古墳より西は標高が下がり、西に200m程の位置で検出した古墳時代の遺構面（南野米崎遺跡、村上・實盛2016）は古墳墳頂との比高差が10m近くある。遺跡の検出状況からみると古墳から南西にわずか1km程で河内湖の湖岸最奥部が存在したとみられ、墳頂部の標高が現存でも約T.P.+21mある墓ノ堂古墳は、河内湖を行き交う船上からよく確認できたことであろう。この古墳は、河内湖を意識した立地選定がなされているといえる。

大上古墳群の造営主体は、馬具や馬歯、製塩土器の出土や、朝鮮半島との交渉に密接なかかわりを持った地域から出土する傾向の強い石見型埴輪（和田2006）の出土などから、讃良地域で馬飼いを行っていた集団と考えられる（野島2008、2009、村上・實盛編2017）。墓ノ堂古墳は、広義の大上古墳群の盟主といえる規模を持っており、同時期の北・中河内地域でも随一の墳丘長である。被葬者は同古墳群の造営集団を指導する立場にあり、河内湖や清滝越え等⁸⁾を用いた流通を広範に掌握管理していた人物だった可能性があるのではないだろうか⁹⁾。（實盛）

8. おわりに

このように、墓ノ堂古墳の意義について、そして大上古墳群との関係について検討してきた。墓ノ堂古墳では周堤上埴輪祭祀が行われ、同時期の北・中河内随一の規模を持ち、被葬者は大上古墳群の造営集団を指導する立場にあり、河内湖等を用いた流通を広範に掌握管理していたとみられる。周堤はのちに東高野街道築造へ利用されることとなった。これまで、基礎資料の不足から墓ノ堂古墳の理解については困難な部分が多かったが、今回の報告および検討によりある程度の材料を提供することができた。今後も調査、検討を重ね、当地域の歴史復元を行っていきたい。（實盛）

註

- 1) 本稿は、野島稔、村上始の指導のもと、實盛良彦、古谷真人の協議に基づき、1、2、7、8節を實盛が、4、6節を古谷が、3、5節は両者共同で執筆し、全体を實盛が取りまとめたものである。
- 2) この鉄塔は、現在の地図とアメリカ軍撮影の昭和23年空中写真（国土地理院・写真図版9）との比較から判断すると、現在の位置より20mほど東の位置に建っていたものとみられる。
- 3) この「老樹」は、現在は既に枯れてしまっており存在しない。当時の写真（写真図版8-2など）をもとに検討すると、墳丘上にはこのころまでは2本樹木が生えていたようである。墓地の利用者にその当時の状況を聞くと、後円部側の、現在の墓地進入路脇に1本と、前方部側の、現在の最高所部に1本が存在したようである。特に前方部側のものは写真を見る限り樹齢を重ねた様相を呈しており、「言い伝え」の該当箇所は前方部側の最高所部である蓋然性が高い。ただ、今ではそこも墓地となっているが、「老樹」の枯死後に石材が確認されたような証言は得ることができなかった。
- 4) 検討の余地が残るが、この出土状況から円筒埴輪を据え置いたものが転落した可能性がある。
- 5) 大上古墳群、清滝古墳群、更良岡山古墳群、三味頭遺跡などがあげられるだろう。
- 6) 今後報告予定であるが、9号墳の円筒埴輪は墓ノ堂古墳の円筒埴輪と同一のハケメが認められる。
- 7) 第21図の作成にあたっては、昭和39年作成の四條畷町都市計画街路図を下図とし、アメリカ軍撮影の昭和23年空中写真（国土地理院）の実体視を行い参考としながら、微高地の範囲を記入した。
- 8) 大上古墳群と同種の石見型埴輪や、押付突帯を貼りつける基部底部をもつ形象埴輪は、木津川流域を中心に多く分布し、河内湖や淀川に加え、陸路の清滝越え等を用いた流通路の存在を示唆する。
- 9) そのような人物の例としては、『日本書紀』継体天皇元年条に記述のある河内馬飼首荒籠などがあげられよう。